

当病院のESCO事業について

当病院は、平成25年度に省エネルギーと温室効果ガス（CO2）削減を目標としたESCO事業を実施するため、現在ESCO事業実施予定者と定期的に協議を行っています。ESCO事業とは、Energy Service Companyの略称で、民間の企業活動として省エネルギーを行い、建物オーナーにエネルギーサービスを包括的に提供する事業です。

ESCO事業者は設備の診断を行い、省エネルギー改修工事を行います。建物オーナーは新たな資金を投入せず、エネルギーコスト削減をESCO事業者に保障してもらうことになります。コスト削減分が工事費用に充てられます。

当病院は泉区に移って来て22年目を迎えて、設備・機器が老朽化して来ていますが、この事業により省エネルギーを実践することにより、一部熱源設備機器は効率的な最新式のものに更新されることになります。実際に事業者から提案される内容は、各病棟の病室に個別エアコンの設置や照明機器のLED化や冷温水発生機更新が想定されています。また、病院の昼間電力需要ピークをカットするためのマイクロコージェネレーション発電機の設置（25～35kw程度3基）も検討されており、この発電機の冷却水排熱を冷温水に利用する等非常に効率的です。その他の効果としてCO2削減による地球温暖化防止や病室系の個別空調機導入による快適な療養環境の実現が挙げられます。

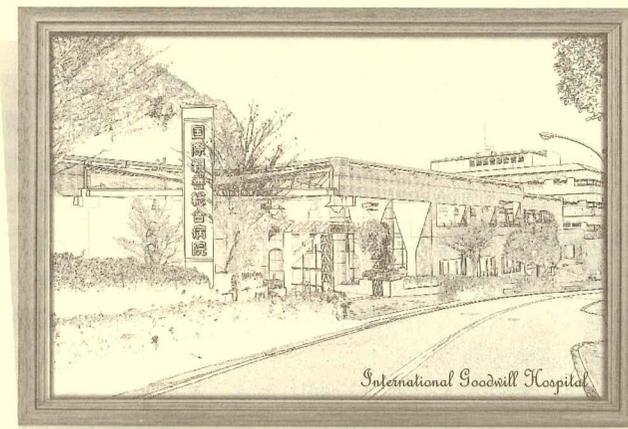
課題として、病棟工事エリアでは音の出る工事も含まれるため、一部病棟閉鎖等による入院患者コントロールや、各セクションの理解と協力が必要とされます。

当院は来年創立150周年を迎えますので、このESCO事業を検討して参りたい所存です。

施設用度課長 鎌田 和彦



病院だより



国際親善総合病院の歴史

Masaru Murai

村井 勝

腰痛・下肢痛、しびれを起こす疾患

Yutaka Yamashita

山下 裕

当病院のESCO事業について

Kazuhiko Kamata

鎌田 和彦

国際親善総合病院

URL <http://shinzen.jp>

〒245-0006 横浜市泉区西が岡 1-28-1
TEL 045(813)0221(代表)
FAX 045(813)7419(総務課)

国際親善総合病院看護部
モバイルサイト



国際親善総合病院の歴史

国際親善総合病院の歴史は幕末にまでさかのぼることができます。

当院が現在地の西が岡に移転したのは平成2年(1990)で、それ以前は関内の中区相生町にありました。昭和18年(1943)から21年までは横浜一般病院と呼ばれる時代がありました。これはその前身である、慶応3年(1867)に創設された日本最初の近代病院とも思われるゼネラル・ホスピタルを日本語に置き換えたものであります。

横浜開港後、外国人居留地内に英仏米蘭独など各国の軍用病院ができる中で、文久3年(1863)最初の公共的な病院として山下町88番地に横浜パブリック・ホスピタルが各国領事団の管理のもとで居留民が資金を提供しオープンしました。元イギリス公使館付医官ジェンキンスが治療にあたりましたが、約3年後に閉鎖のやむなきに至りました。その後山手82番地にあったオランダ海軍病院が一般の患者も受け入れるゼネラル・ホスピタルに改組され、入院治療専門の病院として領事団の監督のもと、居留民の代表で構成される委員会により運営を再開いたしました。外国人管理の病院でしたが、日本人も治療を受け、西欧の近代医術に関心を持つ若い日本人医師たちも学んでいました。第2次世界大戦中は敵国資産に指定、横須賀海軍病院の分院として貸与され、新たに関内に病院を取得し横浜一般病院となりました。昭和21年(1946)この関内の病院は名称を国際親善病院として発展、山手の病院はブラフ・ホスピタル(山手病院)として昭和57年(1982)まで存続しました。山手病院にあった顕彰碑には1863年からのパブリック・ホスピタル、ゼネラル・ホスピタル、ブラフ・ホスピタルの院長ら歴代功績者の名が刻まれ、秩父宮妃殿下のお名前も残っています。

居留民の浄財により維持されたこと、当時の新聞広告に「各国貴賤無格別療治看病」とあることなどは現在の社会福祉法人親善福祉協会による国際親善総合病院の基盤に繋がるとも言えます。

以上が当院の歴史であります。来年は1863年から数えて150年を経ることになります。病院では150周年記念事業として講演会、記念誌出版、記念式典などを計画しております。これを機会に職員一同先人の業績を敬い、医療の原点に立ちかえり、社会から負託された使命に対する責任を果たしてゆきたいと思っております。

病院長 村井 勝

腰痛・下肢痛、しびれを起こす疾患

腰痛に悩む患者さんは、極めて多く、平成22年度国民生活基礎調査では、「腰痛」は最も気になる自覚症状男性1位、女性2位となっています。腰痛の原因となる疾患は、整形外科、内科、婦人科、泌尿器科、血管外科、精神神経科等幅広い領域に及びます。このうち整形外科領域の腰痛・下肢痛を起こす疾患には、椎間板ヘルニア、脊柱管狭窄症、変形性脊椎症、脊椎すべり症をはじめとして、脊椎脊髄腫瘍、化膿性脊椎炎、脊椎カリエスなどがあります。

腰部椎間板ヘルニアは、椎骨をつなぐクッション兼ベアリングである椎間板が原因となる疾患です。好発は20~40歳代で、椎間板の中心にある髄核が外へ突出し、神経根を圧迫して下肢痛を起こします。

腰部脊柱管狭窄症は神経の通り道の脊柱管が狭くなり起こる疾患で、間欠跛行が特徴的な症状です。変形性脊椎症は脊椎骨の変形により生じた骨棘が神経根を圧迫し、症状を起こします。これらは50歳代以降に好発します。

脊椎すべり症には、20歳代以降各年代に平均的にみられる分離すべり症、40歳代以降の女性に多く好発する変性すべり症があり、脊椎の骨がずれて症状が起こります。

整形外科領域の腰痛・下肢痛を呈する疾患が、生命に関係することは少なく、一般に鎮痛消炎剤・血流改善剤・牽引・装具療法などの保存療法で治療します。しかし、疼痛・麻痺症状の増悪、排尿障害などをきたす場合は手術をする こともあります。時期を逸すると手術をしても症状が回復しないこともあります。また炎症性、腫瘍性疾患の場合は早急に対応する必要があります。このため、いたずらに保存療法のみを継続せず、一度きちんとした診断をうけていただくことをお勧めいたします。

整形外科部長 山下 裕



お知らせ

しんぜん院外健康教室を開催します。

日時 平成24年11月15日(木) 10:30~11:30

場所 横浜市 中川地区センター

テーマ 「腰痛・下肢痛、しびれを起こす疾患」